

目次／茶羽のクマゲラ 表紙／いわて文化ノート「陸奥国北部の瓦について」 p.2-3 / 展覧会案内「クマゲラの世界」 p.4-5 / 活動レポート「総合展示室[歴史分野]」 p.6 / 事業報告「文化・芸術が集うとき in 野田村」、活動レポート「文化財等取扱講習会」 p.7 / インフォメーション p.8

テーマ展

クマゲラの世界～未知なる生態に迫る～

The World of the Black Woodpecker

2015年3月14日(土) ～ 5月31日(日)



撮影者：井上大介氏
撮影地：北海道苫小牧
撮影日：2014年5月21日

茶羽のクマゲラ(雄)

約20年前から日本のクマゲラには茶羽の個体が確認されていた。最近では白いクマゲラ(白変種?)も登場している。何が原因なのかは不明。

■いわて文化ノート

陸奥国北部の瓦について

学芸第三課長 鎌田 勉（歴史部門）

■はじめに

『延喜式』は平安時代中期に編纂された格式（律令の補助法令）ですが、寺院の忌詞として瓦葺きと言っていたと書かれています。奈良時代から平安時代にかけて、瓦は寺院や宮殿・官衙（役所）、貴族の邸宅といった特別な建物の屋根に用いられていました。

奥州市水沢区に所在する胆沢城跡において、岩手県内で最初の本格的な瓦葺き建物が出現しました。ただし、坂上田村麻呂造営時の胆沢城ではなく、9世紀後半の第II期政庁正殿と外郭南門に用いられたと考えられています。国府系と呼ばれる単弁八葉蓮華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦の組合せの瓦で、同じ文様・型式の瓦は、瀬谷子窯跡群（奥州市江刺区）と明後沢遺跡（奥州市前沢区）からも出土しています。瀬谷子窯跡群は胆沢城に瓦を供給した瓦窯であることが確認されていますが、明後沢遺跡は胆沢城に関連する寺院跡・瓦窯跡・官衙跡等の説があり、遺跡の性格は解明されていません。



胆沢城跡出土 単弁八葉蓮華文軒丸瓦・連珠文軒平瓦（奥州市蔵 写真提供：奥州市埋蔵文化財調査センター）

■胆沢城跡系の瓦の系譜

貞観11年（869）陸奥国大地震・大津波により、国府多賀城や関連施設も大きな被害を受けました。歴史書『日本三代実録』には、貞観12年（870）9月に捕縛した新羅海賊のうち、造瓦に長けた者を陸奥国に配し国府修理料の造瓦の

分に充てたとあり、捕縛された新羅の瓦工が陸奥国に配され、多賀城再建に必要な瓦の生産を行ったことが分かります。9世紀後半、多賀城政庁第IV-1期の建物跡が、貞観地震直後に再建された政庁と考えられています。この時に用いられた瓦は、①細弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦、②宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦の組合せを主体とするものでした。②の軒丸瓦・軒平瓦のセットが第III期以前にない新羅系の文様構成であり、『日本三大実録』にある新羅系工人派遣との関連が考えられています。前述の胆沢城跡の連珠文軒平瓦は、多賀城政庁第IV-1期所用瓦とほぼ同じ文様であり、新羅系瓦工人による瓦の影響が考えられ、貞観の大震災の復興に伴う瓦といえます。

ところで、矢巾町の徳丹城跡から施釉瓦片が出土していますが、出土地は南門周辺に限られ丸瓦のみでした。緑釉が施された瓦は奈良や京都の宮殿跡で用いられたことから、施釉瓦は格式の高い瓦と考えられます。志波城から徳丹城への移転の際、使用可能な部材を運んだとされていますので、この施釉瓦も元々は盛岡市にある志波城跡の建物に葺かれていた可能性があります。ただし、出土量が少ないので、限られた建物の屋根のごく一部（大棟等）に用いられていたようです。

■国見山廃寺跡の瓦

北上市稲瀬の国見山廃寺跡は10世紀から12世紀にかけて営まれた、古代の大規模な寺院跡です。胆沢城跡の真北約9.5kmに位置しており、鎮守府胆沢城との関連も想定される寺院跡です。ちなみに、明後沢遺跡は胆沢城跡の南約10kmに位置し、真東6kmに貞観4年銘の薬師如来座像を安置する黒石寺があります。さらに、瀬谷子窯跡群は胆沢城跡の



国見山廃寺跡出土 単弁八葉蓮華文軒丸瓦・十字スタンプ文軒平瓦（北上市蔵 写真提供：北上市立埋蔵文化財センター）

北4kmに位置して、4つの遺跡は南北の直線の上に並んでいます。

瓦の出土したのは経蔵跡とされる方三間の礎石建物跡（経蔵跡）からです。単弁八葉蓮華文軒丸瓦と十字スタンプ文と呼ばれる軒平瓦のセットで、その他に鬼瓦も出土しています。軒丸瓦は多賀城跡・胆沢城跡と同じ国府系の文様をもちますが、通常のスタンプ状の範を用いた軒平瓦の文様は特異なものです。技法的には瀬谷子窯跡群産の瓦の伝統を受け継いでいますが、他の要素も取り入れられており、胆沢城系瓦に後続する10世紀代の瓦と推定されています。

一関市の泥田廃寺跡でも少量ですが瓦の出土が報告されています。出土瓦の中に軒瓦はないものの、技法的には国見山廃寺跡の瓦に類似しているようです。

■白山廃寺跡出土の瓦

北上市黒岩に所在する白山廃寺跡からも瓦が出土しています。丈六堂跡と伝えられる本堂跡（第一堂跡）は東西九間×南北五間の礎石が展開すると推測されていますが、瓦は本堂跡ではなく本堂西方約70mの第二堂跡から出土したとされています。数十片の瓦の出土量と軒瓦の存在は、県内の古代寺院跡では国見山廃寺跡に次ぐ内容です。軒丸瓦の破片は所在不明ですが、小田島祿郎氏が作成した単弁十葉蓮華文軒丸瓦の復元図でその様子が分かります。軒平瓦は、全体像は明確ではないものの、唐草文系の文様で

あり、瓦当下部に粘土を貼り付けた段顎だんあごに特徴があります。国見山廃寺跡の瓦とは技法的な共通点はなく、平安京の瓦との比較で平安時代中期から後期の瓦に類似することから、国見山廃寺跡後、この地方に突如として出現した瓦といえそうです。隣接する白山神社には、平安時代後期の十一面観音立像・蔵王権現立像(岩手県指定文化財)が伝えられており、古代寺院が存在した可能性があります。11世紀から12世紀にかけての中尊寺に先行する寺院という説もあり、この時期の瓦と推測することができます。

■柳之御所遺跡の瓦

12世紀、奥州藤原氏の居館跡、柳之御所遺跡から多くの瓦が出土しています。瓦の文様は主なもので、軒丸瓦が3系統、軒平瓦が3系統あり。軒丸瓦は、①剣頭巴文軒丸瓦、②三巴文軒丸瓦、③蓮華文軒丸瓦で、軒平瓦は①剣頭巴文軒平瓦、②剣頭文軒平瓦、③唐草文軒平瓦等があります。文様は二重の圈線けんせんが入るのが特徴であり、陰刻と陽刻の組合せ、中房ちゆうぼうの巴文や外区がいこの連珠文等により多くのバリエーションがあります。同じ文様、同じ技法の瓦は中尊寺伝大池跡からも多数出土していますが、中尊寺境内の他の場所や毛越寺跡、無量光院跡からは12世紀の瓦はほとんど出土していません。

■柳之御所遺跡の瓦の系譜と年代

柳之御所遺跡の瓦は、胆沢城跡等や国見山廃寺跡の瓦との共通点は見出すことはできません。年代的に近いことが想定される白山廃寺跡の瓦とも異なります。一方、巴文・剣頭文系の文様は、12世紀代の平安京跡と周辺部(京都市)で出土する瓦に多く見られる特徴であり、瓦の製作技法も類似しています。

11～12世紀、平安京と周辺部では、法成寺ほうじょうじや六勝寺ろくしょうじ、鳥羽離宮などの大規模



柳之御所遺跡出土 剣頭巴文軒丸瓦
(重要文化財 平泉町蔵 写真提供: 平泉文化遺産センター)



柳之御所遺跡出土 剣頭巴文軒平瓦
(重要文化財 平泉町蔵 写真提供: 平泉文化遺産センター)

な寺院や御所が造営されました。そのため、平安京には讃岐(香川県)や播磨(兵庫県)、丹波(京都府)、尾張(愛知県)等で生産された瓦が、各地の受領を通じてもたらされました。

それらの中で、柳之御所遺跡の瓦の文様・製作技法は、平安宮跡や法住寺殿跡等で出土した山城産(京都市)の瓦に類似しています。平安宮跡の瓦は、藤原信西による大極殿・朝堂院の修造時のものと推定され、法住寺殿跡は後白河法皇いんのごしよの院御所でした。柳之御所遺跡の瓦と類似する山城産の瓦は、平安京造営当初から官窯として生産活動を継続し、新しい様式を切り開いてきた幡枝瓦窯群はたえだ(栗栖野瓦屋くるすのかわらや)の瓦工人による製品と考えられます。以上のことから、柳之御所遺跡の瓦は、信西の修造が行われた保元2年(1157)から、法住寺殿が造営された永暦2年(1161)頃の瓦と共通するものであり、山城産の瓦に強く影響を受けたものと考えられます。観自在

王院跡東側で発見された沢尻瓦窯跡から、柳之御所遺跡と同じ瓦が出土しています。瓦は平泉で製作されたことが確実であり、山城官窯から工人が平泉に赴き、出張製作を行ったことを想定することができます。

柳之御所遺跡の瓦は、主に中心建物の屋根の棟に用いられたようです。軒瓦のある棟瓦を葺瓦いりかがらと呼びますが、同じ時代の絵巻物等から、葺瓦と桧皮葺ひわだぶきの屋根は最高の格式をもつ建物に用いられたことが分かります。柳之御所遺跡の建物が桧皮葺かどうかは分かりませんが、葺瓦が採用された建物は、遺跡内でも格式のある建物と考えることができます。

■花立Ⅱ遺跡の瓦



花立Ⅱ遺跡出土 偏行唐草文軒丸瓦
(重要文化財 平泉町蔵 写真提供: 平泉文化遺産センター)

平泉町花立Ⅱ遺跡第13次調査で、約二千点の瓦片が出土しました。近くには過去に瓦が出土した花立廃寺跡があり一連の瓦と考えられます。軒丸瓦は素弁八葉蓮華文・複弁八葉蓮華文、軒平瓦は偏行唐草文・均整宝相華唐草文です。比較的大ぶりの瓦で、白河天皇が建立した法勝寺跡出土の山城産及び丹波産の瓦と技法的に類似しています。平泉内で窯跡は確認されていませんが、山城と丹波の瓦工人による出張製作の可能性が考えられます。初代清衡が平泉に居館を移し寺院建立を開始した頃の瓦と推定されます。12世紀初め、金鶏山東麓きんけいざんの束稲山・観音山を望む場所たばしなやまで建立された寺院の屋根に、法勝寺を彷彿させる瓦が葺かれていました。

■展覧会案内

テーマ展 「クマゲラの世界～未知なる生態に迫る～」

会期：平成27年3月14日（土）～5月31日（日）68日間 会場：特別展示室

みなさんは、クマゲラという鳥を知っていますか？新聞・テレビ等を賑わしたこともある鳥なので、ご存じの方もおられるとは思いますが、実際に野外でその姿を見たことのある方はというと、少ないのではないのでしょうか？このテーマ展では、クマゲラの知られざる生態や生態系へ果たす役割、日本における現状や分布等を紹介するほか、本州でのクマゲラ研究小史にもふれ、みなさんを「クマゲラの世界」にいざないます。

■クマゲラとは？

真っ黒な身体に真っ赤なベレー帽、黄色の眼をした日本最大のキツツキがクマゲラです。体長は約45cmで、日本では現在、北海道と本州北部にわずかながら生息しています。雄は頭部全体が紅く(図1)、雌は頭頂部のみ僅かに紅いというのが特徴です。かつて長崎県対馬の御岳に同じ属*Dryocopus*でキタタキというキツツキも生息していたのですが、1920年10月16日の捕獲記録を最後に、日本から姿を消してしまいました。キタタキのみならず大型のキツツキ類が、私たち人類による開発行為で、いま世界中から姿を消しつつあります。この状況は、日本のクマゲラも同様です。

■世界のキツツキと日本のキツツキ

ひとことにキツツキといっても、世界には216種ほどのキツツキが生息しています。世界最大はメキシコ産のテイオウキツツキで全長が約60cm、最小はブラジル産のキンビビダイヒメキツツキの約7.5cmですが(図2)、テイオウキツツキは絶滅してしまいました。

日本では前述したキタタキを含め11種のキツツキが生息していましたが、キタタキの絶滅後、チャバラアカゲラとい

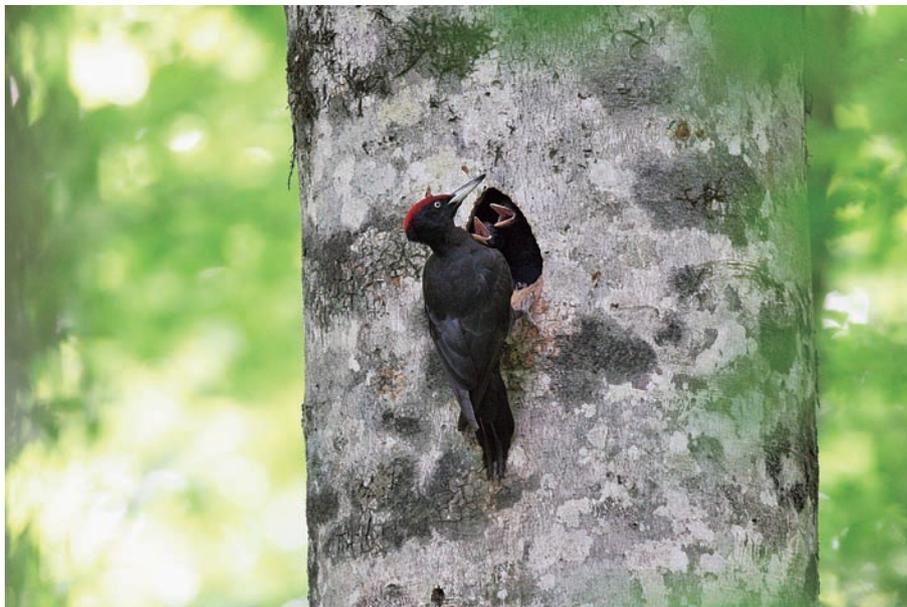


図1 クマゲラの雄親と雛

う種が日本産として新規に追加されたので、現在11種生息していることとなります。具体的に列挙すると、アカゲラ属*Dendrocopos*にはアカゲラ・オオアカゲラ・コアカゲラ・コゲラ・チャバラアカゲラの5種が、アオゲラ属*Picus*にはアオゲラ・ヤマゲラの2種が、クマゲラ属にはクマゲラの1種が、ミユビゲラ属*Picoides*にはミユビゲラの1種が、ノグチゲラ属*Sapheopipo*にはノグチゲラの

1種が、そしてアリスイ属*Jynx*にはアリスイの1種となります。

しかし、日本にはキツツキという和名のキツツキは1種も生息していません。アカゲラ、アオゲラ、コゲラ、クマゲラという和名のように、ほとんどが「～ゲラ」と呼ばれ、ケラの前にそのキツツキを特徴づける名称が冠されています。

■キツツキの語源

それでは、なぜキツツキと呼ばれているのでしょうか？みなさんは、「樹をつつく」からキツツキという和名が与えられたと思っているかも知れませんが、キツツキと呼ばれるようになるまでには、次のような逸話があります。

その昔、蘇我馬子と物部守屋が闘い、守屋は蘇我勢の弓矢にあたり最後をとげました。いくさが終わり、四天王寺を建てましたが、どこからともなくたくさんの鳥が現れ、寺ののきや柱を片端からつつき、ついには破壊してしまいます。すると世間の人は、守屋のうらみが木をつつく鳥となって寺をこわしにきたのだといい伝え、この鳥のことを『テラツツキ』



図2 世界最小と最大のキツツキ

と名づけたそうです。そしてこの「テラツツキ」がなまって「ケラツツキ」となり、その後「キツツキ」と変化。最後にはケに木をあて「木ツツキ=キツツキ」になったと考えられています。

■クマゲラ研究小史



図3 トーマス・ライト・ブラキストン
(北海道大学植物園・博物館所蔵)

1975年（昭和50年）9月19日、ひとりの青年が秋田県森吉山のブナ伐採地で500ミリの望遠レンズを抱えて、へたりこんでいました。そしてはるか前方へ真っ黒い鳥がゆっくりとはばたいて森の中へ消えていくのをぼんやりと眺めていたのです。「よく生きていたな!？」これは筆者の師匠で大学の先輩でもある故・泉祐一氏が本州で初めてクマゲラの撮影に成功したときの回想文です。

今でこそ、クマゲラの名前は世間に知られていますが、当時は北海道に生息する鳥で、「本州には生息しない幻の鳥」と思われていました。明治初期、函館で貿易商を営んでいたトーマス・ライト・ブラキストン（図3）は、日本産鳥類のコレクターでもあり、そのコレクション4

～5千点から北海道と本州の分布の違いを根拠に、「津軽海峡は疑いもなく動物分布上の境界線であった」という異色の学説を発表したのです。このとき討論にたった当時の工部大学教授のジョン・ミルンはこの説を強く支持し、津軽海峡を動物地理学上『ブラキストン線』と呼ぶことを提案したのです。以来、日本のクマゲラは北海道に生息するキツツキという位置づけになったのです。

従って、泉氏の発見以前の1934年（昭和9年）に、川口孫治郎という鳥類学者が八幡平国有林で2羽のクマゲラを捕獲した際にも、クマゲラはたまたま北海道からやってきた『渡り鳥』という扱いにされていたのです。

しかしよくよく調べてみると、伊達家所蔵の古文書『観文禽譜』の中に、クマゲラの解説文と雌の模写絵までが描かれていたのです。その添文の内容は、仙台はもとより、会津、日光にまでクマゲラが生息していたというものでした。このことは江戸時代、既にクマゲラが本州の森に定着し、平成の今日まで細々とその種を維持し続けてきたことを物語っています。

■クマゲラの巣穴を利用する鳥獣

健康な木をつつき、穴をあけてしまうキツツキは、一時、有害鳥という扱いをされたこともありますが、実は木に潜む昆虫類を捕食し、人間が斧を使わずともゆっくりと森林の更新を促進させる有益な鳥であることがわかっています。

また、クマゲラほかキツツキ類があけた巣穴は、ムササビやモモンガ（図4）、ブツポウソウなど他の鳥獣・昆虫類に多々、活用されています。特にクマゲラの巣穴があるブナは、巨大生木であるため、夏は涼しく冬は暖かい、つまり冷

暖房完備のマンションといった感じで、物件をねらう鳥獣どうしの争いが絶えません。



図4 クマゲラの巣穴を利用するモモンガ

人間社会だけではなく、自然界も住宅事情は厳しいようです。これまで筆者らの本州での調査から、以下の鳥獣や昆虫が利用していたことが判明しています。ムササビ・モモンガ・ヤマコウモリ、オシドリ・ブツポウソウ・コノハズク・ゴジュウカラ・ハリオアマツバメ・アオゲラ・オオアカゲラ、オオスズメバチ・ニホンミツバチ・アカヤマアリなど。

■展覧会の目玉資料

今回の展覧会の目玉資料を、以下に紹介します。必見に値するのはクマゲラ雄成鳥の見事な剥製および巣立ち直後に死亡した幼鳥の剥製、川口孫治郎捕獲剥製、キツツキ類の骨格標本、そして本州・北海道の生態写真約100点など、見応えのある展示となっています。その他、解説会には、アマチュア最高峰のカメラマン・井上大介氏を、講演会ではクマゲラ生態研究第一人者の有澤浩先生、クマゲラの音声に詳しい船木信一先生をお迎えして、筆者と対談講演会を行います。また5月には黒尾正樹弘前大学教授によるクマゲラのDNA解析の講演会も行われます。

こそって、ご来館下さい。

(学芸部長 藤井忠志)

■活動レポート

岩手県立博物館の常設展示に新しい展示が加わりました

総合展示室[歴史分野] —「明治時代から大正時代へ」、「太平洋戦争」—

平成の世に入って既に四半世紀が経過したにも関わらず、長い間当館歴史分野の総合展示室の展示は明治時代までとなっておりまして。

そのため、内外から大正時代や昭和時代に関する歴史分野の展示の充実を求める声が高まり、常設展示の改変と補充を行い、9月から公開しています。

今年は終戦から70年の節目の年です。太平洋戦争期の岩手の様子を伝える資料も展示しております。わずかなスペースではありますが、是非ご覧ください。

以下、主な展示資料を紹介いたします。



新しく設置された展示ケース

1 明治時代から大正時代へ

■ 近代の錦絵

江戸期の技法を継承し、明治期にも多くの錦絵が刷られました。岩手県立博物館は、近年評価が高まっている周延の作品をはじめ、養蚕や馬産などの明治期の岩手の産業をつたえる錦絵などを収蔵しています。

しかし、錦絵は常設展示には向かない資料です。他の多くの絵画資料も同様ですが、紫外線をカットした蛍光灯でも、長く展示すると資料は傷み、色が退色してまいりますので、現時点では写真パネルで紹介しています。

周延画「上野不忍池競馬図」は、明治17年東京上野不忍池に新設された不忍池競馬の様子を描いた作品です。明治18年と19年にこの競馬場で開催された競馬において、南部馬最後の名馬と呼ばれた「盛

号」が連続優勝しました。日本の競馬史に輝かしい名を残した「盛号」との関連で貴重な資料です。「盛号」の骨格は昭和55年に復元され、岩手県立盛岡農業高校に保存されています。

■ 自由民権運動関連

自由民権運動家の鈴木舎定^{いえさだ}関連資料の『盛岡新誌』^{もりおかしんし}と演説会の許可状を展示しています。

盛岡新誌は盛岡の自由民権結社「^{きゆうが}求我^{しや}社」の機関誌です。『盛岡新誌』は明治11年に創刊されましたが、明治13年7月に休刊が公表された後、再び号を改め明治14年7月に復刊されています。自由民権運動が急激に高まっていく時期に復活した『盛岡新誌』の内容は、[初刊]において掲載されていた教育・学術論を切り離し、目前に迫った国会開設論や民権・自由論を軸とする政治論が主体でした。

■ 日清戦争・日露戦争関連資料

明治期関連の戦争展示資料として日露戦争の従軍記章の明治三十七八年従軍記章と日清戦争～日露戦争期に着用された陸軍武官軍衣を展示しています。

太平洋戦争に至った原因の一つに、日清戦争、日露戦争、そして第一次世界大戦の勝利の成功体験から抜け出せなかったことを挙げる見方があります。今後展示に関連して紹介したいと思います。

■ 災害関連資料

戦前までの県史の年表を見ると、災害関係の記述が多くあります。三陸津波だけでなく盛岡市大洪水もその一つです。

他にも、昭和恐慌とも重なりやはり太平洋戦争に至る要因になった凶作（農業恐慌）、戦後のアイオン・キャサリン台風も挙げられます。これらの関連資料も準備を整え、展示していきたいと考えています。

■ 原敬の書簡

小熊善太郎あての書簡で、原敬が暗殺

される前年に書かれています。内容は衆議院選挙への応援を求めるものです。

■ 宮沢賢治『注文の多い料理店』、『春と修羅』の初版本

宮沢賢治の初版本は、いずれも当館にも在職していた元盛岡大学教授故大矢邦宣氏が所蔵していた資料です。



また、明治39年から昭和17年の雑誌を展示しています。明治末期から大正期の市民文化期は大衆文化の発展期で、多くの雑誌が創刊されました。

表紙絵の展示が中心ですが、写実的な絵が多くなるなどの変化から、時代の推移が見てとれます。

2 太平洋戦争といわて

戦後50年を記念して平成7年度に開催された企画展「銃後のくらし展」で展示された資料を中心に構成しています。

■ 戦場兵士の資料

臨時召集令状、出征のほりなど出征に関する資料や戦地で使用された軍帽や双眼鏡を展示しています。

■ 銃後の様子を伝える資料

缶詰の代用として使用された防衛食器や1940年に開催予定であった東京オリンピックのノート、盛岡空襲での砲弾破片と^{やつきょう}葉莢^{はえい}など、銃後の様子を伝える資料を展示しています。



「ポスター 聞け サイパンの声なき声を」

(歴史部門 笠原雅史)

■事業報告

平成26年度岩手県文化振興事業団プレゼンツ 「文化・芸術が集うとき in 野田村」

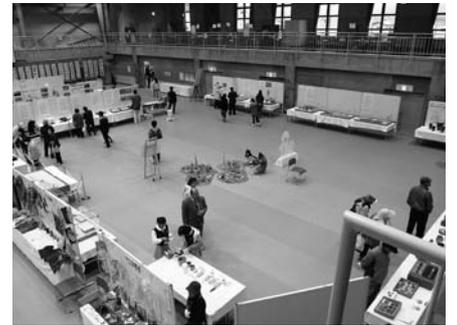
合同展(平成26年度岩手県立博物館移動展・第35回埋蔵文化財展)

平成26年10月30日から11月2日にかけて行われた岩手県文化振興事業団の各事業所が参加する合同事業「文化・芸術が集うとき in 野田村」の一環として、今年度も岩手県埋蔵文化財センターと合同で岩手県立博物館移動展を行いました。今年度は平成23年の東日本大震災以降初めて被災地である野田村で開催し、野田村立体育館にて野田村主催の総合文化祭と会場を同じくして行いました。その結果として、開催4日間で累計1700人を超える多くの方々に御来場いただきました。

今回の移動展では、野田村米田海岸の白垂系で産出した大型アンモナイト化石の複製標本や、野田村天然記念物に指定されているチョウセンアカシジミの実物

標本といった自然史標本から、野田村中^{なか}に^にい^いま^ま新山遺跡から出土した^{わらびてとう}蕨手刀や三代歌川豊国によって描かれた錦絵「陸奥の国野田玉川」、野田村の昭和の風景写真パネルといった歴史文化的遺産まで、野田村および周辺地域に関連する多数の資料の展示を行いました。また、開催最終日にあたる11月2日には、当館の各部門の学芸員による展示解説会を行いました。御来場された多くの方々は、こうした資料を御覧になり、岩手そして野田村が誇る自然文化遺産の価値を再確認され、大変満足された様子でした。

これからも博物館から離れた地域で移動展を開催することにより、多くの方々に岩手県の美しい自然や歴史ある文化の一端に触れる機会を提供することができ



合同展の様子

ればと考えております。

最後になりますが、本移動展の準備・運営に多大なご協力をいただきました、野田村教育委員会の職員及び近隣住民の方々に心よりお礼申し上げますとともに、一日も早い震災からの復興をお祈り申し上げます。

(学芸員 望月貴史)

■活動レポート

文化財取扱いを高めるために

平成26年度文化財等取扱講習会 平成27年2月4日(水)～6日(木)

岩手県立博物館では毎年、市町村で文化財を担当する職員や博物館・資料館に勤務する職員を対象とした文化財等取扱講習会を開催しています。当初は有形文化財に関する講義が中心でしたが、次第に自然史標本等を含めた博物館資料全般に関わる内容に変わってきました。

昨年度まではコース選択性で受講者の希望でコースを選べるようでしたが、今年度は博物館資料全般に関わる共通講習のほかに、初級者のみを対象とした初級コースと、経験のある方を対象とした実践コースに分けることにしました。初級コースでは講師が初級者に的を絞った指導をし、受講者は文化財取扱いの基礎を学びました。実践コースでは被災資料の取扱いや、長年月培ってきた知識・

技術を基にそれぞれが抱えている課題をいろいろな方向から考える事例検討会を開催しました。昨今の厳しい財政状況の中で、できるだけ経済的な対応方法を検討し、文化財取扱いの向上に役立てる場にしたいと考えています。

また、実技講習ではできるだけその道の専門家を講師にして技術の習得をしようと考えています。以前に行った資料梱包の実務では、講師に美術品専門運送業者をお願いしました。市町村職員の方ももちろんのこと、当館職員にも有益であったことから今後もその方針ですすめていく予定です。これを受けて今年度は岩根スタジオの岩根悠樹氏に講師をお願いして、半日間写真撮影の実技講習をしていただきました。事前に受講者からアン

ケートをとり、文化財の撮影をしたことがない、撮影機材が揃っていない、撮影場所がないなど、条件が整っていない場合を考慮した講習となりました。

本講習会を機に県内の文化財担当者のネットワークができ、文化財を守り伝えていくためのよりよい環境ができればと願っています。

(学芸二課長 吉田 充)



共通講習 文化財資料取扱概論



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション〈2015.3.1～2015.6.30〉

お知らせ

- ゴールデンウィーク臨時開館 4月27日(月)
ゴールデンウィーク期間中の4月27日(月)は臨時開館します。
4月21日(火)～5月6日(水)は無休、5月7日(木)は休館です。

国際博物館の日

- 入館無料 5月17日(日)
今年5月18日「国際博物館の日」が月曜休館日にあたるため、5月17日(日)が入館料無料となります。
- 県博バックヤードツアー 5月17日(日) 要事前申込
国際博物館の日記念「県博バックヤードツアー」を開催します。ふだんは見られない収蔵庫などを特別にご案内します。
5月17日(日) 自然コース 13:30～ / 歴史コース 13:40～
所要時間約60分 各コース定員10名 要事前申込 参加無料
応募方法：往復葉書に①希望コース、②住所、③氏名、④電話番号を明記の上、当館「県博バックヤードツアー」宛に郵送してください。締め切り後、返信用葉書で連絡します。
応募期間：4月7日(火)から4月28日(火)まで〈必着〉
応募多数の場合は抽選となります。

展覧会

- テーマ展「クマゲラの世界～未知なる生態に迫る～」
平成27年3月14日(土)～5月31日(日) 特別展示室
クマゲラの知られざる生態や生態系に果たす役割、日本における分布や現状等を詳しく紹介するほか、本州でのクマゲラ研究小史にもふれ、来館者をクマゲラの世界に引き込みます。
- 展示解説会 特別展示室 要入館料
3月15日(日) 14:30～15:30 ゲスト：井上大介氏(アマチュアカメラマン)
5月3日(日) 14:30～15:30 展覧会担当者が全解説
- セミナー兼日曜講座 講堂 当日受付 聴講無料
3月22日(日) 13:30～15:30
対談講演会「日本産クマゲラの生態とその保護」
講師：有澤 浩氏 (元東京大学農学部附属北海道演習林助手)
船木信一氏 (秋田県立博物館主任学芸主事)
藤井 忠志 (当館学芸部長)
4月26日(日) 13:30～15:00
「クマゲラ研究小史」講師：藤井忠志 (当館学芸部長)
5月24日(日) 13:30～15:00
「ミトコンドリアDNAを指標としたクマゲラの遺伝的多様性の解析」
講師：黒尾正樹氏 (弘前大学農学生命科学部生物学科教授)

企画展「商家の暮らし～花巻・佐藤家の衣食住～」

平成27年6月30日(火)～8月23日(日) 特別展示室
※詳しくは次号でご紹介します。

伝統芸能鑑賞会

倉沢人形歌舞伎
6月21日(日) 13:30～15:00 講堂 当日受付 鑑賞無料
出演：倉沢人形歌舞伎保存会
花巻市東町に伝わる人形歌舞伎の公演です。人情話と義太夫の語りをお楽しみください。※県指定無形民俗文化財

古文書入門講座

5月9日(土)～5月24日(日) 毎週土曜・日曜 全6回 10:00～11:30
『子供早学問』などの江戸時代の寺子屋の教科書で、かな文字から古文書の基礎を学びます。
定員：30名 ※要事前申込み(応募者多数の場合は抽選)
対象：一般(初めて古文書を学ぶ方)
募集期間：4月7日(火)から4月28日(火)まで〈必着〉
応募方法：往復葉書に、①古文書入門講座受講希望、②住所、③氏名(ふりがなも)、④電話番号を明記の上、当館の古文書入門講座係宛に郵送してください。募集締め切り後、返信用葉書で連絡します。

観察会

第69回自然観察会 「外山森林公園昆虫観察会」
6月28日(日) 9:00～14:00 現地集合・解散
標高800mの外山森林公園を会場に、低山の昆虫を観察します。
講師：千葉武勝氏 (元岩手県農業試験場研究員)
参加費：100円(傷害保険料)
※要事前申込み。詳細は博物館までお問い合わせください。

笛の会

笛の会～名笛「田鶴子」に寄せて～
4月29日(水・祝) 10:00～15:00 講堂 当日受付 要入館料
出演：篠笛山口流
水戸徳川齊昭の娘明子(松姫)が盛岡藩主南部利剛に嫁ぐ際に持参した龍笛「田鶴子」に寄せて、篠笛山口流による演奏会です。
龍笛「田鶴子」展示 総合展示室[いわての歩み]古美術コーナー
展示期間：4月21日(火)～7月20日(月・祝) 予定

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 講堂・教室 当日受付 聴講無料

- 当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
- * 展覧会関連講座
3月8日「動物の「行動の化石」」 望月貴史(当館学芸員)
* 3月22日 13:30～15:30 テーマ展「クマゲラの世界」対談講演会
4月12日「岩手のカワシンジュガイの今とこれから」
渡辺修二(当館学芸員)
* 4月26日「クマゲラ研究小史」 藤井忠志(当館学芸部長)
5月10日「八戸藩士に選ばれた最初の27人」
佐々木勝宏(当館学芸員)
* 5月24日「ミトコンドリアDNAを指標としたクマゲラの遺伝的多様性の解析」
黒尾正樹氏(弘前大学農学生命科学部生物学科教授)
6月14日「南部家の歴史と由緒を重んじた藩主・南部利視」
兼平賢治氏(東北大学文学研究科助教)
6月28日「生命史をひも解くーカンブリア紀ー」
望月貴史(当館学芸員)

週末の催し

◆ミュージアムシアター

- 毎月第1土曜日 13:30～15:00 講堂 当日受付 視聴無料
3月7日 昭和の岩手特集Ⅱ 一般向け
自分たちで生命を守った村(沢内村)(30分/実録)
県政映画いわて(昭和35年度、36年度、39年度、41年度、42年度)
4月4日 北東北の自然 中学生～一般向け
世界遺産シリーズ～白山山地 プナ林と動植物の豊かなつながり
～(20分/実録)、本州のクマゲラ(21分/実録)、クマタカ 舞う空の下で～北上山地・クマタカとヒト共生の物語(35分/実録)
5月2日 動物アニメ 子ども向け
くまのがっこう(37分/アニメ)、ぐるんばのようちえん・クリーナおばさんとカミナリおばさん(29分/アニメ)
6月6日 宮沢賢治 小学生～一般向け
風の又三郎(30分/アニメ)、狼森とざる森、ぬすと森(19分/アニメ)、注文の多い料理店(23分/アニメ)

◆チャレンジ!はくぶつかん

- 毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付
チャレンジ!マークをさがしてはくぶつかんをたんけん!
3月 14日・15日・21日・22日 テーマ：鳥
4月 11日・12日・18日・19日 テーマ：動物
5月 9日・10日・16日・17日 テーマ：形
6月 13日・14日・20日・21日 テーマ：水

◆たいけん教室～みんなでためそう～(予約制)

- 毎週日曜日 13:00～14:30 幼児・小学生20名程度
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※5/3「こはくの玉づくり」のみ有料500円、その他は参加無料
※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。

3月	1日	まが玉アクセサリー	22日	石のオリジナルはんこ
	8日	スライムであそぼう	29日	板がえし
	15日	ばねのキツツキおもちゃ		
4月	5日	3Dメガネで万華鏡	19日	オリジナル卵をつくらう
	12日	化石のレプリカ	26日	こいのほりーす
5月	3日	こはくの玉づくり ※500円	24日	まが玉アクセサリー
	10日	ばねのキツツキおもちゃ	31日	チャグチャグ馬コづくり
	17日	スライムであそぼう		
6月	7日	チャグチャグ馬コづくり	21日	手作り万華鏡
	14日	草花のそめもの	28日	のびちぢみしゃくとり虫

定時解説

平日～土曜日 13:30～14:30 / 日曜日 10:30～11:30
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご希望におこたえしています。

利用のご案内

- 開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)
- 休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※4月27日(月)は臨時開館
年末年始(12月29日～1月3日)
- 入館料 一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料()内は20名以上の団体割引料金
※5月17日(日)は無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第144号 平成27年3月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
------------------------------------	---